

魔術用にと海外から取り寄せたお香。
軽い気持ちで使ってみてから身体の調子がおかしい……。

胸が張って使っていたブラもサイズが合わなくなっ
てしまい仕方なく外して登校していた……。制服も
胸元がキツく、チラチラと見てくる男子生徒の視線
がうっとおかしい。

そして、ある日――。

胸が張って痛いので、こっさり絞り出そうとした所を
クラスメートの男子に見られてしまった――。

「はあはあ……宇佐美さんのミルク、今日も美味しいです」
放課後になると、男子生徒が秘封倶楽部の部室に来るようになっていた……

「う……は、早くしてよね……」

口止め料として、母乳を吸わせる、という
変態的な要求をしてきたからだ――

どのみち放つといっても勝手に母乳が
溜まってしまいうので定期的に
絞らないといけないけれど……

同年代の男子に胸を吸われるというのは、かなり恥ずかしい。

男子生徒は一心不乱に私の胸を舐めている。
驚愕みにされた胸を圧迫されると、母乳が滲み出ると同時に、
どぐりと体温も上がってしまう。

「んっ……は……あ……ぐっ」

初めは痛いだけだったのに、
今ではゾクリとするものを感じてしまっ
倒錯的な状況も重なり頭がクラクラしてしまう。

「ッッッ!」

突然、ふとももを捕まれ、
弛緩しかけていた身体がこわばる。

「ちよ、ちよっと!」

何やつてるのよっ!」

「ちよっとぐくらい良いよね。
宇佐美さんだつてバラされるの嫌でしょ?」

ぐと言葉に詰まると再び行為に没頭しはじめる。
胸だけでなく、脚からも痺れが走り、
膝から力が抜けそうになってしまう……。

「ぐっ……ぶはあ……も、もうちよつと良いよね……」

ふわふわした感じのまま、男子生徒に目をやると、
いつの間にか男子生徒はちんぽを曝け出していた。

ビクン……ビクン……と痙攣するソレは、
既にヌラついて反り返っている。

「よ、良くないわよっ！
早くソレを仕舞って!!」

大声にならない程度に
文句を漏らすのが、

男子生徒は収まらないと
いった感じでスカートに
ソレを擦り付けてきた。

「や、やめっ……んあッ……」

抗議しようとする、
胸をまた強く揉み上げ始められ、
ぶちゆりと母乳を吹いてしまう。

少し鉄臭い甘い匂いと、
男子の精臭が混ざり合い、部屋を満たしていく。

乱暴な乳搾りにひたすら身体を震わせる事しか出来ない……。

びゅっ……じゅっ……ぐゅっ……

「んくッ!……あ……んあッ!」

「う、宇佐美さん……
宇佐美……はあはあ……」

溜まったモノをどんどん
吸われていく開放感、
相手が好きでもないただの
クラスメイトという倒錯感に
感覚が狂わされていく……。

男子の腰の動きが早くなり、スカートを越しても熱さが伝わってくる。
這い寄るように登ってきた熱が胸の奥に貯まり――

男子が一際強くちんぽを擦り付け、ぎゅうと私を強く抱きしめる。

「あッ……いっ……宇佐美さ……ムムムッ!!」

胸の奥の熱が弾け、視界が白く飛ばされて――。

びゅちゅッーブジュルルッッッ!!ぐゅぐゅぐゅッッ!!

「あ……はッ……」

あああ……ッ!!」

お互いに熱い粘液を

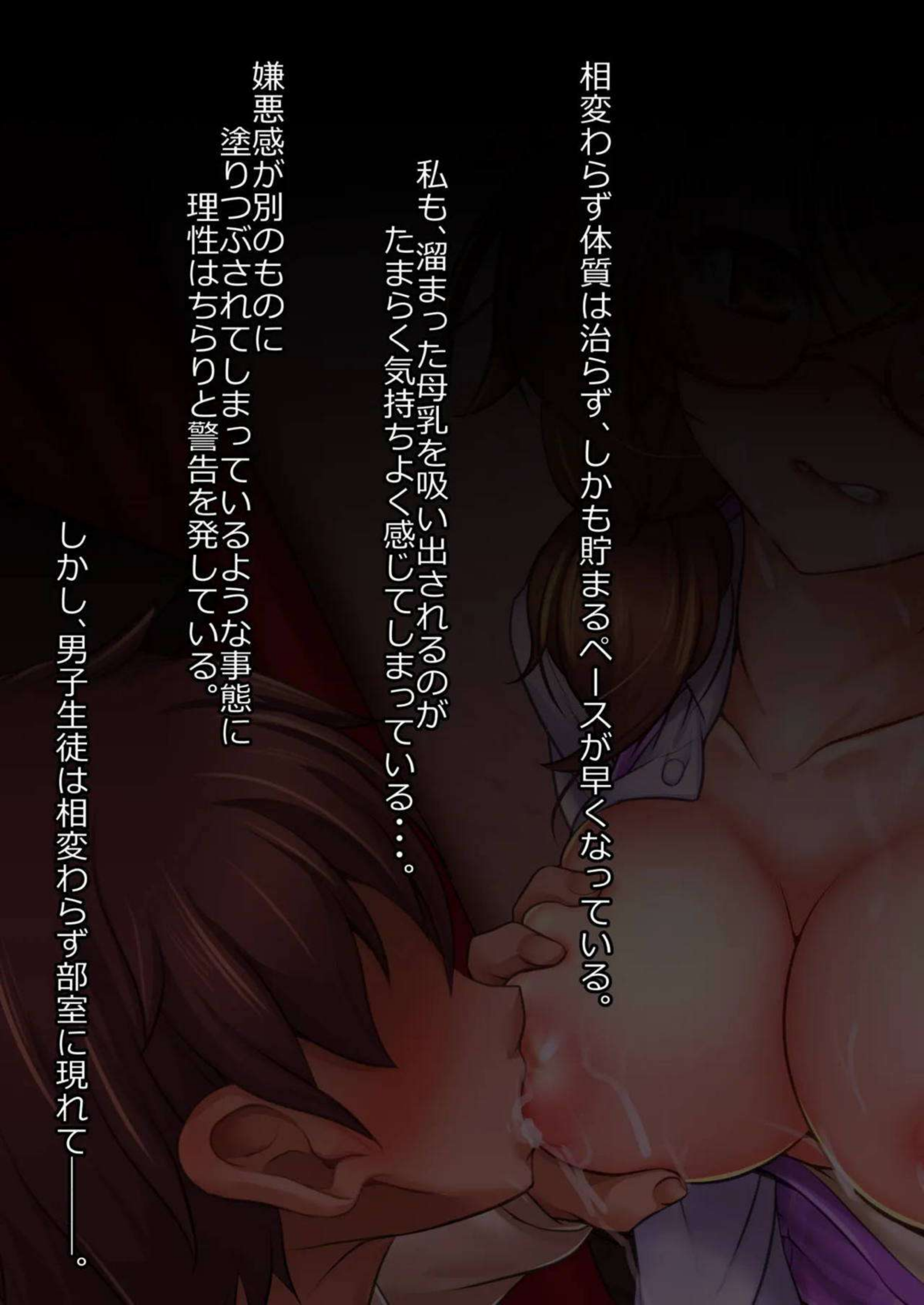
吹き出しながら、
白く汚れていく……。

熱に浮かされる頭に、
男子が叫んだ言葉が気にかかる。

童顔な顔に昏い瞳。

なにか別のモノを見ているように感じてしまい

背筋にゾツとしたものが走った――。



相変わらず体質は治らず、しかも貯まるペースが早くなっている。

私も、溜まった母乳を吸い出されるのが
たまらなく気持ちよく感じてしまっている……。

嫌悪感が別のものに
塗りつぶされてしまっているような事態に
理性はちらりと警告を発している。

しかし、男子生徒は相変わらず部室に現れて――。

「んっ…んっ…あ…あ…あ…」

相変わらず秘密を盾にされ、授乳行為を強要されている…。

「はあっ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

しかも、「イッ」は私の事を「ママ」と呼び始めて、母乳を飲み干そうと…。

「やめてよ…ッ
私はあんたのママじゃない…ッ…」

「今日もママのおっぱい一杯溜まってるね
全部飲んであげるよー！」

「んっ…んっ…あ…あ…あ…あッ」

淀んだ瞳で胸を搾り、母乳を啜り上げる。

私に誰かを投影して…

ただ、授乳するだけの存在としか見てない…。

要求は少しづつエスカレートして…
スカートは脱がされ、下半身を

コイツにさらけ出してしまっている。

「うう…ママあ…ボクのもミルク絞りするみたいに強めに扱いてよお…」

ちんぽをふとももに擦り付け、先走りですり付けてくる。

嫌々握りしめると、ビクリと反り返し、

大量の汁をこぼし始める。

「くっ…キモ…いッ」

「スリ始めると、

精臭がむわあ…と拡がり、
喉の奥に絡む。

ぬちやぬちやと手に
絡みつく透明な汁が
ひどく気持ち悪い…。

「くっ…ママあ…ボクのもミルク絞りするみたいに強めに扱いてよお…」

私の事など聞いていないように「コイツは勝手な事を言い、
胸にむしやぶりついて、ひたすら母乳を搾る。」

「はあはあ……ママのミルク一杯飲んで一杯射精すからね……ッ」

男子が身体を震わせ、興奮した体臭を撒き散らす。
この匂いを嗅いでしまうと嫌なのに、
頭の奥がとろんとしてくる――。

塊がまたぐぐぐと胸に溜まっていくのを
意識しはじめて、身体が熱くなる。

「く……いの、勝手に……ッ」

強烈な嫌悪感と、相反する感情、
ソレが母乳を吸われるたびに
大きくなりつつある……

「ふ……あ、ち、違っ……うっ……ん……ッ!!」

ぐぐぐぐとお腹の辺りが疼く。
我知らず、ちんぽを扱く手が
早くなってしまう……。

「あーっ……スス……好き……」

気持ち悪い、キモチワルイ
男子の言葉が呪いのように刺激と共に私の頭に染み渡る。

「い……や……アంతなんツ……かあッ」

精一杯、拒絶しようとするが、お腹の熱は耐え難いほど
燃え上がり、どぶどぶと愛液をこぼす。

おへソの辺りがキュウと
締め付けられる感覚、
せり上る胸元に熱い塊が
身体がこわばる。

男子が一際大きく乳首を
咥え込むと、激しく吸いたてて――

ビュチツ!! びゅくん!
どぶどぶどぶうううツツツツ!!

「あッ……ん、あああああッツツツツ!!」

胸からぐっそりと塊が抜けていく開放感。
激しく吹き出した精液がふりかかると、
脚をピンと伸ばし絶頂してしまう。

頭が真っ白になって、ガクツガクツと身体は痙攣を繰り返す。

最後の一滴まで母乳をゴクゴクと音を立てて飲まれてしまった。
——ようやく元の世界が戻ってくる。
と、男子の昏い瞳と目が合った……

「ママ……今度はママの中に帰っても良いよね……」

ちんぽを私の大事な所にあてがい、
禁断の言葉を呟く……

「そっ……それ……は……」

ぴたりと閉じた門はぬるりと汁を溢れさせ、
その奥は待ちわびているモノ……

ああ——私はいつまでこの誘惑に抗えるのだろうか——。





































